

谷川俊太郎 「朝のリレー」 私解

池田一彦

いま、一篇の詩が自分の目前にあって、それをひとつの教材として国語教育の現場で生かしていきたくと思ったとしたら、まず第一にしなければならぬのは、その詩を「自分の眼で読む」と以外にありえない。この作業をなおざりにした国語の授業の実践というものはそれ自体無意味だし、ひいて大学における文学作品の講読や演習もその出発点は同じものであるはずだ。他者の眼による自己の「読み」の客観化、他者との対話（たとえば「授業」という形態自体はもっとも代表的なもののひとつであろう）はもちろん重要なモメントだが、それをも含めて全ては目前の文字の羅列による一種の現象をいかに「自分の眼で読む」かから始まると言ってもよい。生徒の実態を把握した上での実際の授業の進め方もおのずとそこから案が構想されてくるといったものであるとわたくしは考える。

ただ「自分の眼で読む」といっても、極端に言えば「自分」の

数だけ異なった読み方が出てくる可能性はあり、問題はその深淺、妥当性如何ということになる――が、少しでも未知なるものの発見があったり、知的刺激を他に与えうるような読み、いわば面白い読みの試みが常に尊重され目指されるべきであるということも確かだ。傑れた教材というのはそうした読みの可能性を秘めているものだろうし、「読み」を経るの感動を必ずや読者に約束するものでなければならぬ。

以下、谷川俊太郎の「朝のリレー」という詩についてささやかながらわたくしなりの読みを提示し、大方の叱正を乞いたいと思う。

朝のリレー

谷川俊太郎

カムチャツカの若者が

きりんの夢を見ているとき

メキシコの娘は

朝もやの中でバスを待っている

ニューヨークの少女が

ほほえみながら寝がえりをうつとき

ローマの少年は

柱頭ちゅうとうを染める朝陽あさひにウインクする

この地球では

いつもどこかで朝がはじまっている

ぼくらは朝をリレーするのだ

経度から経度へと

そうしていわば交替で地球を守る

眠る前のひととき耳をすますと

どこか遠くで目覚まし時計のベルが鳴ってる

それはあなたの送った朝を

誰かだれがしっかりと受けとめた証拠なのだ

詩作品にせよ小説作品にせよ、いわゆる文学教材の「読み」は、その「題名」に始まり「題名」に終わるといって過言ではない。

「朝のリレー」もまたそうした「読み」の規則が有効に機能する典型的な一例である。「朝のリレー」とは何か、この問いかけから先ずは始まる。この五文字に託された作者の心情はさておき、われわれが何をこの五文字から読み取りうるのか、また読みとらねばならないのか。次の一行目から始まる詩の本文によって次第にその正体は明らかにされていくであろうが、そうした助けを得ずともわれわれはまず「題名」だけから読み取りうるものを懸命かつ虚心に読み取らねばならない。「朝のリレー」、そこから生み出されるイメージはさまざまであろう。たとえばごく一般的には「運動会」？ 本来そのクライマックスに配される「リレー」が「朝」というのは少々不都合な感無きにしもあらずだが、「朝」が「リレー」して行く？ というのも普通では思いつかない。さまざまな想像と考えの内から少なくとも客観的に辿り着くのは、この五文字が「ことば」の連なり具合からいって「朝」と「リレー」とその両者をつなぐ「の」という三つの部分から成り立っていることだ。そして「朝」は（「昼」や）「夜」のイメージとの関連で、また「リレー」は次から次と「つなぎ渡す」イメージで捉えられることに誰しも気づくことだろう。実際この詩では「朝」という文字・ことばが五度にわたって用いられ、詩全体を「朝陽あさひ」の明るく活気づいたイメージで彩っているし、「夜」は文字・こ

とばそれ自体としては抑えられ「夢を見ている」「寝がえりをうつ」「眠る」等の動詞的表現で、詩全体に「朝」というものを浮かび上がらせる地味な背景として一步退いた役割と場を占めている。「リレー」の「つなぎ渡す」イメージも、「経度から経度へ」とか、そのものずばり「交替」といったことば、更には「送った」↑↓「受けとめた」といった連繋に見事に変換され、詩全体に動きのイメージを付与していると考えられる。だが、わたくし流に考えるに「題名」にまつわる最大の問題は、いまひとつ取り残してきた「の」であり、「朝のリレー」を「朝・の・リレー」と分割して見た時の中心に居坐わるこの「の」の一字こそ、この「題名」読解の鍵をにぎる存在なのだということには必ずしも誰もが気づいているとは思われない。何故か。「の」という一文字・ことばの持つ固有の表情が他の「朝」や「リレー」に比して余りに稀薄であるからだ。だが、先にも述べたように作品の「読み」は「題名」に始まり「題名」に終わる。ここでひとまず「題名」を離れよう。

詩の本文を読んでいく。第一印象として漠然とながら与えられるのは、不明だった「朝のリレー」という題名の意味についてのひとつの解答であり、詩全体から得られる中心的イメージは「地球」の自転に代表される、大きな回転という動きのイメージであ

る。読み手はここで必ずや「地球」を相似形に縮小したあの「地球儀」を思い浮かべるにちがいないし、地軸を斜めに傾けたまま一定方向にクルクル回り続ける地球儀を頭に思い描くことなしに「経度から経度へ」などといった表現を真に理解できるものでもない。その上に、点綴された「カムチャツカ」以下の固有の地名を押し当てていってこそ、第一の読みの印象は形を得たと言えるのだ。「カムチャツカ」と「メキシコ」が、また「ニューヨーク」と「ローマ」が正確にはなくともまさしく「地球」というひとつの大きな球の表と裏の関係で位置することを確認して、しかも「地球」は回っている、と実感的につかむ時、いちおうこの詩の表現世界全体に不明朗な部分は無くなったと言える。そしてその時、「地球」の自転という現象を「朝のリレー」という似もつかぬかたち（＝ことば・着想）で捉える作者の視点の斬新さに改めて驚かされ、日常的視野や感性がともすれば陥りがちなこわばりからこともなげにわれわれを解き放つ、ことばの魔術ともいえるべき「詩」表現の特質に思いを致すことになるのである。

さて、この詩の構成上の最大の特徴は「対比」にある。詩の一行目から八行目までの中からは、誰でもいくつもの「ことば」と「事柄」における対比関係を見出すことができる。地名、夜と朝、表現構造のさまざまな局面で「対比」が構成されている。たとえ

ば「カムチャツカ」以下の地名を「寒い」↑↓「暑い」、「新しい」↑↓「古い」土地の対比と捉え（「カムチャツカ」には特に「夢」としての「きりん」との対応も認められる）、「若者」↑↓「娘」、「少女」↑↓「少年」、また「きりんの夢を見ている（とき）」↑↓「朝もやの中でバスを待っている」、「ほほえみながら寝がえりをうつ（とき）」↑↓「柱頭を染める朝陽にウインクする」等々の対比を指摘するなどほさして困難なことではないし、中学生程度なら一行目から四行目までと、五行目から八行目までとが構造として大きな対をなすことも充分理解可能だろう。第二連でも、後半四行が語と内容の上で同様の見やすい対比関係を所有している。「眠る前のひととき耳をすますと」↑↓「どこか遠くで目覚まし時計のベルが鳴ってる」、「あなたの送った朝を」↑↓「誰かがしっかりと受けとめた」等々。だが、注意しなければいけないことは、それらどのような対比でもこの詩の内容からいって決して安易に静的なイメージで捉えて足れりとしてはならないということ、あの「地球」の自転しながらの絶えず動いて止まないダイナミズムの内にこそ捉えなければならぬということだ。もちろん、これはこの「朝のリレー」という詩自体が要求する「読み」である。さらに加えてこの詩全体のダイナミズムを支え、保証するものは何かといえ、ひとつにはこの対比関係から突出したいくつか

の表現であろうし、またひとつにはそれら詩中の対比的構造を内から破り出てわれわれの前にたち現れる残りの数行ということになる。まず前者について。「若者」「娘」「少女」「少年」というのは明らかに意図的な選択である。「老若男女」の四態が人間という存在の常態を偏りなく表わすとすれば、ここでは明らかに「若い」「男女」ばかりが突出したかたちで現れる。「朝」の比喩である人間の「若さ」はこうして詩全体の固定化を防ぎ、回り続ける「地球」に次から次と瑞瑞しく潑刺とした生命感・生命力を充満させていく。また、なぜ「きりん」という南国の動物の「夢」を見、「朝もや」（これはまだ「朝陽」のよく見えないでいる状態だが）の中を確かにこちらに向かって走って来ているであろう「バス」を待ち、「ほほえみながら寝がえり」をうち、「柱頭を染め」ていく「朝陽」（ちなみに「アサヒ」はやはり「朝日」でなく「朝陽」でなければならぬ。「陽」に連想される「太陽」が次行で「地球」を導き出すと言うことも可能であるから）に「ウインク」すなわち熱い眼差しの投げかけをするのか、これらも皆単なる対比関係から突出したかたちで「動き」のイメージを強調することに一役買っているのである。そしてそのどれもが「朝」を迎える人々の期待感、生きる喜び、明るい生命力等によって美しく彩られていることは言うまでもない。第二連

の後半四行について見ても、「眠る前」の夜のしじまの彼方に「目覚まし時計のベルが鳴って、」という切り詰めた表現には、「鳴っている」とたった一語の違いであるにもかかわらず、あの「ベル」があたりの沈黙を破って唐突に鳴り響くピリピリとした緊張感がありありと感じとられるではないか。さらにこの二行は実質的には第一連の八行までの具体的表現を抽象化した上で繰り返すという性格をもち（これも一種の対比である）、それゆえにまたこれらの表現が全て作者と読者の想像力によって成り立っていること、「仮定」の表現と言ってよいものであったことに改めて気付かせてくれる（「耳をすます」ことによって現実に「地球」の裏側で鳴っている「目覚まし時計のベル」が聞こえてくることはない）。ここに仮定を推し進める想像の力というものがやはり突出した形で現前してくるのである。最終行の「証拠」という言葉は「なのだ」という強い断定の語調とも相俟って（実はもうひとつ直前の「しっかりと」という語とも呼応しているのだが）かなり強烈な印象を与える言葉で、むしろ静的な、「動き」のような固定したイメージを有する例外的な存在だが、それは却って詩全体の最終行、いわば「押さえ」としてふさわしく、ある意味ではこれも対比関係から突出した表現としてこの詩全体に十分な重みを付け加えていると言えるのだ。念のために付言するなら、先

に「想像力」の所産として捉えた「眠る前の」以下の二行を「それは」を受けて「証拠なのだ」と押さえるのは、決して矛盾ではなくて、むしろこの詩の第一行目から繰り出された作者―読者共有の「想像力」の世界の強靱さの証しなのである。

さて、詩全体のダイナミズムを保証するものとして先に挙げたその後者について。具体的には次の五行のことである。

この地球では

いつもどこかで朝がはじまっている

ぼくらは朝をリレーするのだ

経度から経度へと

そうしていわば交替で地球を守る

この五行（正確には空白の一行を入れて六行）は、既に見てきたような見やすい対比関係を構成していないが故に、逆に却ってこの詩全体の中枢的役割を担う。前後の対比の破れからいわば主題として突出してくるので、この詩が本来もっている訴えが大きなうねりとなってわれわれ読み手に迫ってくるのである。初めの二行は、第一連八行目までの要約であり、「この地球」で「いつ

もどこかで「夜と裏返しするように「朝がはじまっている」ことの認識が総体として与えられ、一行目から対比を気にかけてつものすらすらと読み進んで来たわれわれは、改めてこの認識を受け止め、しばしの間そこに立ち止まらざるを得ない。日常的で余りにもあたりまえすぎる事実というものは、ことさら「ことば」で言明された時、少なからぬ衝撃を人々に与える。日常的知見や認識の死角を衝かれた思い。「この地球では／いつもどこかで朝がはじまっている」という何気ない表現にわれわれはもっと驚いているのである。そして続く第二連初めの三行——特に「ぼくらは朝をリレーするのだ」への飛躍的発想の妙／はどれだけ強調しても強調しすぎるといふことはないのではあるまいか。それに比べれば「経度から経度へと」の行のもつ倒置法的效果とか、「そうしていわば」といったおおよそ詩に似合わしからぬ散文的表現による異化の効果とか、「交替で地球を守る」といった詩全体の流れからは若干唐突とも見られる動詞の使用といった問題ですら、よほど霞んで見えてきてしまうということも否めない。ただ、「守る」についてはこの語が本来「目守る」意をもっており、「地球」上の「いつもどこかで」「誰かが」きつと送り送られる「朝」と共に起きて、生きて、心から眼を見開いて存るのだ、といったこの詩の主張にもっとも深い関係を有するものであることを押さえて

おく必要はある。「地球」をも守りうる「目（＝眼）」の力。そしてその活力源である「朝」。そして……。

まとめに入ることにしよう。「朝のリレー」を読むにあたって、「題名」について述べ、「対比」の特色に触れ、この詩全体のダイナミズムを約束している諸要素を見てきてここに至ったのであるが、この詩の生命ともいうべきものを表現に即して捉えようとするなら、われわれはやはり第一連の終わりの一文と第二連の初めの一文、そしてその連関へと再び思いを呼び返さざるを得ないだろう。

この地球では

いつもどこかで朝がはじまっている

ぼくらは朝をリレーするのだ

この凝縮された四行／こそがこの詩の生命であり、詩読解の鍵である。第一連というのは前の二行からなる一文に代表されるように飽くまで「朝」が主役なのであり、擬人法とまでは言えないにしろ、それに近く全体「朝」に彩られ所有されているかの趣きがある。「この地球」の上を少しずつ少しずつ這うようにして巡

り続ける「朝」。その意味ではまさに「朝が」リレーするのであり、それ以外の何者もそこに介入する余地は無いのだ。それが空白の一行を経ることによって、たったそれだけのことによって、あまりにも大きく詩の世界は変転する。「いつもどこかで朝がはじまっている」から「ぼくらは朝をリレーするのだ」へと。大げさな比喩を使うなら、ここには確かにひとつのコペルニクスの転回とも呼ぶべきものが歴然として存在するのだ。「朝」という主役が単なる動作対象・目的物へと転落し、俄に「ぼくら」という新しい主人公が正面に突き出てくる。「ぼくらは」という「は」は、文法的に見て必ずしも「ぼくらが」という時の「が」と同じではないが、文法を超えてここではほとんど「ぼくらは」は「ぼくらが」ほどの重い意味をもち得ている。「朝」が真の主役だったのではない。それは見せかけで実は「ぼくら」が「朝を」リレーしていたのだ、という目も眩む鮮やかな急転回。そして「対比」と言えばこれ以上に大きく重要な対比関係は、実際この詩中に見出せないのだ。換言すれば、これは今まで全く触れてこなかったものなのであるが、第一連全体と第二連全体の対比関係ということにもなるだろう。その上さらには詩の「連」という構成法とそれを読み手に明示する空白の一行のもつ意味の大きさをも充分にこの詩は教えてくれるはずだ。無限に近い「あなた」の集合体と

しての「ぼくら」この「地球」上に生きる全ての人間が、その人間の総力が「朝」に活力を与えていたというひとつの解答。「が」から「を」への転換。本詩最大の劇はまさしく空白の一行を舞台にむしろ静かに優しく行われたと言うべきだろう。

いま「ぼくらは」と「ぼくらが」がこの詩のこの箇所においてはほとんど等価であるように述べてきたが、もちろん正確には両者が全く同じということはありえない。ことばのニュアンスのレベルで簡単にその違いについて触れておこななら、「ぼくらは」と言った場合には、「ぼくらが」と言った時ほどの気負いや自己主張の強さ、激しさ、硬さといったニュアンスが伝わってこない。しかし、一見優しげな呼びかけ・誘いかけのニュアンスをもっていて、各所に散らばった一人ひとりに説得的に働きかけ、皆で集まって「朝をリレーする」というひとつの作業を一緒に成し遂げていこうとするモチーフが読み取れるようになると思う。その意味でやはり「ぼくらは」は「ぼくらが」に置き換えることができ
ない。

「題名」に触れて終わる。「朝のリレー」の「の」が鍵であり、最大の問題であると前に述べたのは、いま見てきたような第一連最終部分と第二連初めの一行との間に行われた「が」から「を」への、すなわち「朝がリレー」とすると言いうる世界から「朝をリ

「朝のレレー」する世界への大きな転換が本詩最大のヤマ場であり、「朝のレレー」という、「の」はその「が」をも「を」をも意味として包含する許容量を有し、しかも一方で飽くまでも「の」自身であり続け、「朝・の・レレー」という題名をしっかりと支え得ているという理由からであった。助詞ひとつの働きも疎かにしない「読み」の大切さ、ひいては難しさを自戒をこめて上記したつもりである。

付記 谷川俊太郎「朝のレレー」は、現在「光村図書」と

「教育出版」発行の中等学校一年生用の教科書に採用されている。